



Title: ブックトークとビブリオバトルへのお誘い

大館市立中央図書館では11月28日(月)の午後1時半から3時半まで、「ブックトークの仕方」と題した研修会を行います。ブックトークとは、子どもや成人の集団を対象に、テーマに沿った何冊かの本の内容を紹介することです。県立図書館職員を講師に効果的なやり方を学びます。図書館や学校関係者を対象にしていますが、それ以外にも本好きな方や関心のある方の参加を歓迎します。24日締切りの予定を延長しますので、まずは中央図書館(電話42-2525)までお電話ください。

また、12月4日(日)午後2時から中央図書館2階視聴覚室で、久しぶりの「ビブリオバトル」を開催します。ただいま出場者募集中です。見学や野次馬も歓迎しますが、できればお気に入りの本を1・2冊持参してください。みんなで好きな本について情報交換ができればと思っています。出場申し込みは当日までOK、見学は自由です。どうぞいらしてください。

❖ シリーズ物の誘惑

私は全集が苦手です。

例えば高校の図書室に揃いがあつた筑摩書房の『世界ノンフィクション全集』は、『世界最悪の旅』から始まる全50巻。高1の春に第1巻を読んだら面白かったので全部読もうと思ったのですが、結局3分の1読んだかどうか。勉強も読書も予定どおりにはいかないという教訓を得た3年間だったなあ(遠い目)。60年代に出たこの全集、中央図書館では今も所蔵しています。

例えば90年代に出た『ちくま日本文学全集』は文庫サイズの全60巻。これも1年もあれば読みきれ目算だったのに、1冊も読みきっていません。中でも、何度かチャレンジして毎回挫折しているのが堀辰雄。『風立ちぬ』はなぜか数頁で嫌になります。意味わかりません。市立図書館にこの全集はありませんが、それ以外の立派な造本の全集が各種ありますし、個人全集もいろいろ揃っています。

それに引き換え、シリーズ物は割と行けます。

例えばPHPエディターズ・グループ発行の『面白くて眠れなくなる』シリーズ。理数系の軽い語り口の本で、入門書というより入門への誘いざないといった趣きです。稲垣栄洋著『面白くて眠れなくなる植物学』(2016年、中央図書館470/I)がとて面白かったです。こんな本に中高生の頃出会いたかったなあ、もう少し理数が好きになっていたかも(も一度遠い目)。このシリーズ、中央図書館は今のところ9冊所蔵しています。

例えば司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズ。単行本で全43巻。関連本も含めると中央図書館には76冊もあります。本編は一通り読んだかな。中でも第29巻『秋田県散歩、飛騨紀行』は何度も読み返しています。狩野亨吉と内藤湖南、それに菅江真澄が大好きになること請け合いです。

というわけで、特定の作家やテーマに沿って何巻組と決めて発行される「全集」と、何巻か決めずに順次発行していく「シリーズ物」を個人的に比べてみました。

❖ 県立図書館の本を置いています

比内図書館の新刊棚を見ていたら、高齢化をテーマにした資料展示が行われていて、その中に南伸坊の『オレって老人?』という本が。2013年にみやび出版という聞きなれない出版社から発行された本でした。裏表紙を見ると秋田県立図書館のシールが貼られています。

県立図書館の重要な業務として「市町村立図書館への支援」があります。「相互貸借」とか「レファレンスの支援」とかいろいろありますが、「セット貸出」もその一つ。花矢、比内、田代の図書館では結構活用しており、『オレって老人?』も比内図書館がセット貸出を受けたものでした。

相変わらず笑える内容で楽しく読みましたが、中で老人問題とは関係ない「複製美術館の楽しみかた」という文章に引き付けられました。淡路島の北端に「大塚国際美術館」という豪勢な美術館があり、中には実寸大の世界の名画がぎっしり揃っているそうです。「モナリザ」も「牛乳を注ぐ女」も「ゲルニカ」も、それにシスティーナ礼拝堂の天井画も。もちろん本物のはずはなく、全ては陶板に焼き入れたものです。

面白かったのは20世紀の終わり頃修復されたダ・ヴィンチの「最後の晚餐」の話。この美術館では修復前と修復後の2枚を一挙に鑑賞できるそうです。

……修復した人には悪いけど、これは、ものすごくマズインじゃないの?と私は激しく思った。人物の表情や、立体感が、あきらかに修復後にヘタクソになっているのだ!!…… (65頁)

入館料は大人が3240円とかなり高いけど、いつか行ってみたいと激しく思ったことでした。

この県立図書館のセットは1月6日(金)に返却する予定です。読みたい人はどうぞその前に。と打ったところで、念のため市立図書館のOPACを検索してみると、なんとこの本、中央図書館に所蔵があるのでした。知らなかった。オレって老人? (陽)